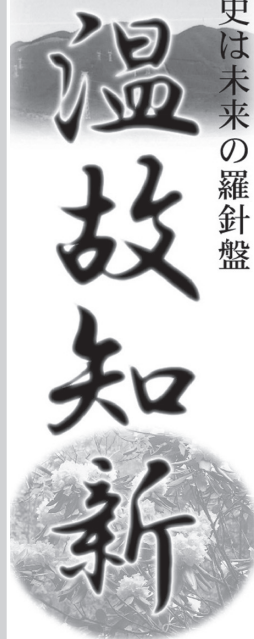


歴史は未来の羅針盤



これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

今回は、『近江日野の歴史』第三巻「近世編」の中から、江戸時代の民俗と関わる史料について紹介します。

民俗としての景観

歴史学の多くの分野では、古文書などの文字史料が研究の基本となっています。近世は文字文化が普及した時代で、多くの歴史が

記録され、今に伝えられています。その中であって、民間に伝承される風俗である民俗は、人の生きざまや生活そのものであることから、記録されなかつたり、記録されたとしても史料として伝えられなかつたりします。また、親から子、子から孫へと何世代も変わらずに引き継がれるものがある一方で、一世代どころかわずかな年月でも激変・消滅してしまうものがあるということも民俗の特性です。

現代の文化や風習には、近世に始まつたり定着したりしたものがたくさんあります。衣食住を例に

見てみましょう。衣文化では、麻や藤などに代わって木綿が普及し、藍染の野良着として一般化しました。食文化では、米・野菜・魚を主とする日本の食生活が定着し、サツマイモなどの外来作物や茶・煙草などの嗜好品も広まりました。住文化では、畳が普及し、仏壇を置く仏間が造られるようになりました。

著しい変化が視覚的に実感できる民俗文化として、町並みや風景などの景観があります。かつてはこの集落にも火の見櫓があり、田の畦には稲架木が見られるなど、戦前の風景はほぼ近世のそれを引き継いでいたといえます。しかし、伝統的木造建築が近代的な高層建築へと変り、田畑はほ場整備事業により機能的で規格性の高い耕地に生まれ変わり、細く曲がりくねった道や川は直線的で幅広い道路や水路となりました。このように生活に密着した景観は、近世と現在とでは大きく様変わりしてしまっています。

残された高札場

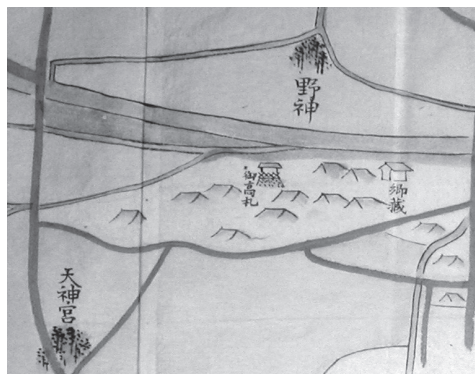
近世的景観を構成する要素の一つとして、高札場があります。時代劇で触書に人びとが群がる場面としてよく見受けられます。高札は、法令や禁令などを記した板札のことで、制札とも呼ばれます。キリスト教を禁ずるキリシタン禁制の高札はよく知られています。

町辻・橋詰・街道分岐点など人目につきやすい場所に掲示され、その場所を高札場といえます。高札場はこの町や村にも必ずあり、高札が掲げられた辻を意味する「札の辻」という地名はその名残です。日野では、大窪の興仙寺前ですが、ここもかつての高札場です。

高札場は時勢に適さないという理由から明治六（一八七三）年に撤去されました。しかし、町内には、処分されることなく残された高札場がありました。河原の天満宮の手水舎がそれです。慶応四

（一八六八）年の同村明細帳には「御高札場御座候」とあり、この高札場が天満宮に移築されたと思われる。また、弘化三（一八四六）年の同村絵図には、集落の中に「高札」が描かれ、石積みと思われる上に矢来（柵）を巡らせ、板葺きと思われる屋根が架かっています。「天満宮」や「野神」との位置関係から、高札場のおよその位置が推測されます。

このたび手水舎が新造されることにより、一四〇年以前の高札場が解体処分されることになりました。町としては数少ない現存史料を確保するために、これを譲り受け、高札場は、現在整備を進めている綿向神社参道沿いの旧山中正吉邸の一面へ移築保存することになりました。



▲弘化3年の河原村（部分、大字河原文書）